

昔話における終止機能

小澤俊夫

全三十七巻の『世界の民話』(注1)シリーズ編集作業のなかで、幾つかのおもしろいことに気づいた。たいていの日本の昔話の場合、話の初めの部分を読むとその話の終わりがだいたいどのようになるか予想がつくものである。ところが、『世界の民話』のシベリアやオーストラリアなどの話においては、予想のつかない終わり方をしているものがある。そこから、話の終着点にはおもしろい問題があるのではないか、という考えを抱くようになった。もちろん終着点を問題にすると、その話がどのように始まるかという出発点もやはり問題にしなければならない。

われわれ日本人が日本の昔話を読むと、終わりはこうなるだろうと見当がつくものである。たとえば継子が森の中に捨てられたという話で始めると、きっとその継子はだれかに救われるだろうと予想がつく。あるいは、ある男が動物を助けてやりました、といって話が始めると、きっと助けられた動物がやがてその男になにか恩返しみたいなことをするだろうと予想がつく。あるいは動物が競争したり、なにかを争って物を奪い合うばあいには、ばかにされていた弱い方が勝つだろうと予想がつく。日本の昔話の終わり方については予想がつく。予想がつくというためには、まず日本の昔話をよく知っていることが必要であることはもちろんだが、話の出発点と終着点には一種のパターンがあるということがいえる。昔話は荒唐無稽のように見えるが、確かにパターンをもっている。

一番多いのが、森の中に子供が捨てられて、たった一人ぼっちになるという話であろう。日本の「継子の苺とり」、グリムの「ヘンゼルとグレーテル」、「白雪姫」などはその出発点のパターンの代表例である。

さらに、動物を助けてやったという出発点を見ると、後で恩返しがあると思うのは、日本人が恩返しという行為を非常に大事に思っており、世間あるいは日本の文化の中には、そのような行為に対しては恩返しをもって報いるのが当

り前だと普通に考えられている、といった一種のエトスが基本的にあるかもしれない。そうすると、この出発点と終着点をあらいざらい探していけば、話の背景にあるその民族の文化なり、信仰なり、考え方なりが、多少なりとも明らかになるのではないだろうか。

ところで、出発点と終着点という曖昧な言い方では、話型の問題を無視してしまうことになる。昔話は、独得の話型 (Erzähltyp) というものをもっている。たとえば「さるかに合戦」という、研究者たちが認定した話型があり、それが日本全国に少しずつ違って分布している。ということは、当然、出発点も終着点も話型によって違ってくることになり、話型ごとに分類して探究しなければならない。けれどもこの終着点という観点からみた昔話研究はまだその緒についたばかりであり、話型との関連については後の機会にゆずることとする。

さてここでは異類婚姻譚から始める。異類婚姻譚に関しては以前に別のところで述べたことがあるが^(註2)、その時点ではまだ思い及ばなかったことが、終着という観点からはいくつか見えてくるからである。

筆者はかつて、七十余の日本の昔話をドイツ語訳してドイツで出版したことがある。それが出来上がったときに国際口承文芸学会のおもなメンバーに配ったところ、ヨーロッパ系のメンバーからの反応がほとんど同じように出てきた。日本の昔話というのはどうも終わっていないのではないか、という反応である。たとえば「つる女房」の話は周知の通り、ある男が傷ついた鶴を助けてやる。その夜、見知らぬ女が男の家へ来て、泊めてくれと言う。そして泊めてやっているうちに女房になる。女房になってある時、自分は機織りをするが機織り部屋を覗かないでくれ、と言う。けれども、夫はそう言われるとなおのこと覗きたくなり、とうとう覗いてしまう。すると女房と思いきや、実は鶴が自分の羽根を抜いて機織りをしていた。やがて、また女房の姿になって部屋から出てきて、私の本当の姿を見られてしまいました。だからもうこえ以上あなたのところにはいられません、と言って鶴になって飛んでいく。男はそれを見送っていた、で終わる。

この話は日本ではかなり共感をもって迎えられている昔話と思われるが、この話についてヨーロッパ系の学者たちの反応はほとんど一様に、あれは終わっていない。女房が鶴になって飛んでいくのを黙ってみているとは何事だ、日本の男は何をしているのか、というのであった。確かにヨーロッパの場合には、見てはならないというタブーを犯されて女房が去ると、タブー違反をした方が、

去ってしまったパートナーを捜して長い長い族に出ることになる。三千里も向こうの山に見つけたことか、竟に捕われている女を救って初めて二人がいっしょになり、話が完結するのである。ヨーロッパの感覚からすれば、つる女房という話は前半部分のタブー違反だけで、これからいよいよ失われたパートナーを求めて探索が始まるところで終わっている。日本の男はそれをしていないというのである。

ヨーロッパの研究者達がそのように感ずるのも無理ないことである。「美女と野獣」とか「蛙の王様」などヨーロッパの代表的な異類婚姻譚を見ると、ほとんど最後は結婚しているからである。グリムの童話集一番「蛙の王様」では、王女が泉のほとりで金のボールを上投げて遊んでいた。あるとき上に投げすぎて、金のボールが池の中に落ちて沈んでしまう。王女が泣いていると、蛙が出てきて、なぜ泣いているんだ、ときく。王女が、こういうわけで金のボールがなくなった、と言うと、蛙が、それでは私が拾ってきてあげるから何をくれる、ときく。王女は、何でもあげる。仲間にもしてあげる、という。すると蛙は、それではいっしょに御飯を食べさせてくれるね、私を親しい友達にしてくれるね、と念を押してボールをとってくる。ところが蛙がボールをとってくると、王女はもう約束のことなど忘れてひとりで帰り、すました顔で父親と御飯を食べている。そこへ蛙がベタベタとやってきて、約束を忘れたの、と言い、強引に膝の上に乗る、テーブルの上に乗る、いっしょに御飯を食べさせてくれ、と言う。父親は、約束したのだからその通りになさい、と言うが、王女は気嫌をそこね、ついには自分の部屋に帰ってベットに横になろうとする。ところが蛙もついてきて、自分もベットに入れてくれ、と言うので、王女はたまりかねて蛙をつかんで壁にパンとぶつける。すると壁にぶつかった瞬間に蛙は王子に変身し、それが大変みめ麗しい王子だったので、王女は気について結婚する。

フランスの「美女と野獣」という話も構造的には同じで、実は美しい王子の変身した姿である動物に、末娘は生贖のつもりで行ったのだが、王子は、末娘の愛情によって最後に呪いが解けて、王子に変身して、末娘と結婚する。ノルウェーの「太陽の東、月の西」という話もまったく同じである。上述のグリムの「蛙の王様」の話でも、蛙が王子に変身してから王女に告白するところによれば、「自分は王子だったが、悪い魔女に呪いをかけられて蛙の姿にされていた。今やっとあなたによって救われました、」となっている。ここに救済の概念がはたらいで、呪われていた者が救われ、人間として結婚する。つまり、厳密

には、日本的な意味では、ヨーロッパの話は異類婚ではないのである。元来人間だったものが呪われて動物という仮の姿になっている。それが救われて人間に戻り、救い手と人間同士として結婚する形になっているからである。今の話を図解してみると、この事がもっとよくわかるであろう。

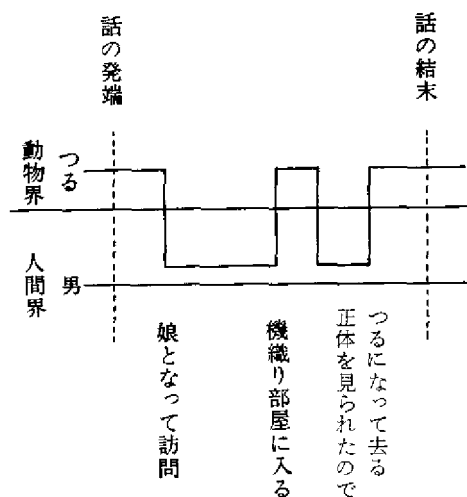


図1 つる女房

まず人間と動物の境界線、話の発端、結末、上を動物界、下を人間界などの設定をする。日本の「つる女房」のばあい、男のほうはずっと人間であるから、話の終わりまで人間である。鶴のほうは、話の発端では、鶴の姿で現われる。ところが夜になって娘の姿になって男のところへきた。ここでいつの間にか人間の姿になっている。そして部屋に入って機織りする。後で夫がのぞいてみると鶴になっているのであるから、また鶴に戻っている。話によっては何度も機織りをして、三回目のときに夫がダブーを破った、という語り方もある。とにかく機織り部屋に入っているときには、鶴になっている。そして、戻ってきて、「あなたは私の本当の姿を見てしまいましたね。だから私はもうあなたの所にはいられません。」といて、鶴になって飛んでいきました、となる。するとこの鶴は、話の前にも鶴だったのだから、結局、元来動物だったものが、一時人間になって、そしてまた動物になって戻っていったのである。それ故結末に別離がある。ヨーロッパの場合を図2で示す。

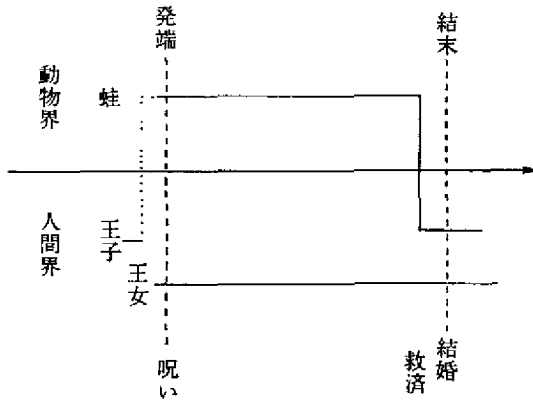


図2 蛙の王様

話の初めは蛙。そして蛙の姿で話は進む。最後に壁にぶつけられた瞬間に人間に戻って、そしてそのまま終わって、結婚がある。人間に戻ってから、王子が告白するところでは、「私は実は王子だったんだ」というので、この前身をもし点線で書くとすれば図のように人間界に至るわけである。従って、上の動物の線を見ると、ちょうど日本と逆になっている。

日本の「つる女房」では元来動物だったものが仮の姿として人間になり、ふたたび動物になる。ヨーロッパの「蛙の王様」「美女と野獣」では元来人間だったものが魔法をかけられて動物になるが、魔法が解かれてまた人間に戻る。ちょうど向きが逆になるのである。従ってこういう話に慣れているヨーロッパあるいはキリスと教團と言ってもいいかもしれないが一の人達にとっては、「つる女房」は終わった感じがしないことになる。救われて、人間として結婚して初めて「ああ終わった、」ということになるのであろう。

なお、この問題にはもう一つ興味深い点がある。それは「救われる」(erlösen)という言葉がドイツのメルヒェンにはしばしば出てくるということである。これは魔法の問題と密接にかかわりあっている。日本の場合、どの昔話を読んでみても、動物から人間になるところ、あるいは人間から動物になるところをわざわざ問題にしている語り手はいない。例えば「つる女房」では、つるを助けてやりました。つるは喜んで空に飛んでいきました。男が夜、家に帰って寝

ていると、若い女がやってきて道に迷ったから泊めてくださいと言いました、となる。また、部屋に入っていくところも、ただ部屋に入っていきました、と述べられるだけである。出てくるところも、女房は部屋から出てきて、あなたは私の正体を見ましたね、と言うだけである。このように、どこでどのようにして変身しているかは、問題にしないところが特徴的である。日本の昔話では、変身は自分の力で行なう。動物が自分の力で変身するのである。これに対してヨーロッパの昔話の場合には、そこに必ず魔法の力が必要で、その根底にはキリスト教の力があるように思われる。しかしながら、今は終着点に話を絞るため、これ以上は触れないことにする。

さて、部屋をのぞくと言われたのにのぞいてしまうタブー違反が別離を引き出し、この「別離」で話が終わるパターンが日本には多い。すると、なぜそれで終わりうるのであろうかという問いをたてなければならない。

動物が自分で変身したということは、古代の日本人にとって動物は神様であったということから説明できる。このことは民俗学、文化人類学、神話学等いろいろな分野で証明されてきていることである。農村における昔話調査においても、例えば、鰻の頭に魔力を感じ、農家の入口にさしているのを我々は現在でもまだ見ることができる。動物たちは日本人にとって非常に大きな神としての力を持っていただろう。それゆえに動物が変身しても、もっとも不思議なことではなく、可能なこととして考えられていたと思われる。そのような神様の正体を見る、つまり神聖なるものを見てしまうことはタブー違反であり、その違反者は、神様に見捨てられるのだという考えが、はたらいっていたらうと考えられる。

ところで、現在私達が農村での昔話調査の際、老人たちから話を聞き、その後で、「どうして鶴はいつてしまったんだろう、」とたずねてみると、「畜生が人間の嫁になっているということはそもそもいけないうことだから、正体を見られたらもういられないよ、」という答がかえてくる。あるいは、動物が嫁として来た場合のように去るだけではすまず、必ず殺されて終わる「猿婿入り」のようなすさまじい話の場合に、「どうしてあそこで殺されたのだろう、」とたずねると、「猿のくせに人間の嫁をもらうとはけしからん、殺されるのが当り前だ、」というのがほぼ一致した答えなのである。

一方、若い人達、特に都会に住んでいる若い母親たちと話をしてみると、これが逆になって、「猿がどうして殺されなければならないのか、何も悪いことをしていないのに。それどころか人間のために田んぼに水を入れてくれたりし

ているではないか」。鶴の場合も、「宝物を織ってくれたのだからそこで大事にしなければならないのではないか、」という感想が聞かれる。これは、ヨーロッパ人の感覚と非常に近づいてきていると言えるのである。

今まで「つる女房」と「蛙の王様」、「美女と野獣」を例にして対比しつつ論じてきたが、ここで話をもう少し広げてみよう。まず、グリム童話集の第三番「マリアの子」を手短かに見てみたい。

ある貧しい家に娘が一人いた。マリア様がその貧しさに同情して、天から降りてきて、その娘を天にひきとり、養うことにした。ある時、マリア様が、「わたしはでかけるので留守番をしておくれ、」と言い、鍵を十三個渡した。しかし、「この鍵で十二の部屋までは開けて見てもよいが、十三番目の部屋は絶対に開けてはいけない、」と言い残す。留守を預った娘は、十二の部屋を次々と開けていく。そして全部見終わると、どうしても十三番目の部屋を見たくなり、ついに開けてしまう。つまりタブー違反を犯してしまうのである。部屋の中には神様の像があり、後光で輝いていた。娘は思わずその金色に輝いている神様に触わり、手に金色がくっついてしまう。それはどうしてもとれない。やがてマリア様が帰ってきて娘は鍵を返すのだが、そのとき、指に付いた金色がちらりと見えてしまい、マリア様から問いつめられる。「約束を破ったね。」しかし娘は嘘をつく。「破っていません。」二度目に聞かれても、三度目に聞かれても嘘をつく。それでとうとう天国から追放されることになる。さて、娘は眠りに落ちて、気がつくとう上の荒野にたった一人でいる。罰として口もきけない。どうしてもいかわからず、木のほらあなで暮らすことになり、木の実を拾ったりして命をつなぐ。何年もたつうちに、髪の毛が長くなっていく。そこへ王様が現われて、とても美しい娘なので城に連れ帰り、結婚する。そして子供が生まれる。そのとき、マリア様が現われて、何年か前のあの嘘を問い質す。「あの部屋を開けたでしょう。」しかし娘がまた否定すると、マリア様は子供を天国に連れていってしまう。第二の子供が生まれたときにも、第三の子供が生まれたときにも同じことがおきる。まわりの人たちは夫である王様に、「この嫁は自分の産んだ子供を食べてしまう魔女だ、」と訴える。一回目、二回目までは王様は妻を守るが、三回目にはついに守りきれなくなって火炙りの刑をいいわたす。薪が積み上げられ、火がつけられ、火がメラメラと燃え上がる。そのとき彼女の心の氷がやっと溶けて後悔する。「ああ、私が本当の事を言えたらいいのになあ。」その瞬間、罪は許され、マリア様が三人の子供を連れて降りてきて、「罪を悔いたものは幸せになる、」と言って子供を返す。

さて、本稿で取り上げる話の終着点という観点からこの話をみてみよう。鍵のタブーを破り、天国から下に降ろされてしまう前半部分は、話の機能から考えればタブー違反の結果としての「別離」で終わっている。主人公はこれによりひとりになる。別離によって主人公が孤立するというのは日本の場合、上述の如く、完結した一つの話の型を示しているのである。日本の「つる女房」や「猿婿入り」は、タブー違反の結果としての別離で終わっている。

ところがグリムの「マリアの子」の場合ではそこで終わらない。そこへ王様が現われて、美しい娘だったので城へ連れて帰り結婚しました、と後半部分が始まるのである。すると、この話の場合、タブー違反の結果としての別離が次の話を引き出していることになる。日本の場合はこの「別離」が終着点になるけれども、今の「マリアの子」の場合にはタブー違反の結果の別離が主人公の孤立を生み、その孤立が次の話の出発点になっているのである。そこで話の結合機能を果たしているのである。日本の場合には終着点になるのが、ヨーロッパの場合には出発点になっているといえる。

ここで、この結合の機能の問題について述べてみる。

先に、日本の昔話ではストーリーが終わったとき、それが別離で終わっていても終結となる、と述べたが、完全に終止しているか、終止の機能が完全に果たされているかという点、必ずしもそうとは限らない。つまり理屈からいえば、ここに登場する男は、はじめは独り者だったが、途中から女房がきて機織りをして、それが高く売れたりして多少財産になったものの、大事なパートナーに去られてしまったのである。つまり、完結した終わり方ではないのである。

構造分析では欠如という概念が使われるけれども、この主人公にはパートナーの欠如という問題が生じて終わったのである。パートナーを得た後、ある程度財産を築いたかもしれないが、日本の昔話においては、全部が全部この財産を重視して語っているわけではない。つまり、たとえ財産を得たとしても、大事なものはそのことではなくて、相手に「去られた」ことなのである。するとこの話は、男がパートナーを失った意味での欠如の状態が終わっているわけで、未解決のものがそこに残っていることになる。その点では、ヨーロッパの話とは、終わり方が違うように思われるのである。ヨーロッパの話では男女が人間として結婚しているわけで、一人の時には欠如の状態であったものが、パートナーを得て明らかに充足された、として終わっている。

ところが先ほどの日本の昔話では、パートナーを失ってしまったという欠如がありながら、そのまま話が終わっているのである。

先程の「マリアの子」の場合も話の中間点で天から下界へ、荒野へ降ろされてたった一人になってしまったのである。これも欠如の状態といえるだろう。つまり、最初の欠如状態に戻っているのである。

グリムの場合には、あるいはもっと広げて、ヨーロッパのメルヒェンの場合には、こういう形で欠如から欠如に戻った場合には、終結しないのである。一旦終結しているように見えるものの、終結しないのである。日本の昔話風に言えば「マリアの子」は、天国から荒野へ降ろされて、一人ぼっちになりました、と言って終結することもできるかもしれない。しかし、その状態は、一種の偽終止なのではないか、終結していない、偽似終止なのではないだろうか。つまり完全に解決して終わっていない、ということなのである。終わろうと思えば、あるいは無理に終わらせようとすれば終わりにすることができる。一つ欠如したものを抱えたまま終わることはできるかもしれないけれども、それは完全な終わりではない。というのがこの「マリアの子」の荒野に捨てられた状態ではないかと思われるのである。

ところが、日本の場合には偽終止でも構わない。偽終止でも終わりうるのである。それはなぜかと言うと、前述したように、動物が人間の嫁になろうとはけしからん、という論理のほうが強く働くからではないだろうか。

音楽の用語、西洋のいわゆる機能と声学の方から言うと、和音の終止機能のうち、完全に終止していないのに終わったように見せかけ、けれどもまだ終わっていないからその解決に向かって新たに進んでいく、そういう場合の一時的終止を指す偽終止という機能がある。これは昔話の終止機能を考える上でも有効なように思われる。

機能と声学では、ドミソというのが「トニカ」すなわち主和音で、これを五度下に下ろしたのが「サブドミナント」、また、この五度上に積み重ねられた三和音が「ドミナント」と呼ばれている。そして、これらの和音を順番にドミソ、ドファラ、ソシレとひびかせて、その次にまたドミソに戻ると、この時完全に終わったと感じられるのである。



機能と声学では、これを一番基本的な終止機能と捉えている。

ところがモーツァルトなどがよく使うことだけでも、曲の途中で和音の中にひとつ余計な音を入れておくことがある。ドミソにひとつラの音を入れる。このラはだいたい下へくることが多いようだが、そうすると、ドミソラという音がすることになる。ソミドラ、とそのラの音が鳴っている。すると解決しない感じがするのである。ドミソが鳴っているのに、だいたい解決しているのだが、でもひとつ解決しない音の中に聞こえているわけで、こういう音の動きを偽終止というのである。そしてそれから、そのラの音を解決すべく次のフレーズが始まっていく。このような展開があちらこちらに見られるのである。

このことは、ヨーロッパの昔話のあの段階、すなわちマリアの子が一度タブー違反のために一人にされて、そこからまた次に一人ぼっちであることを解決するために新たな話に接続していく、ということと非常によく似た現象ではないかと思われる。

いきなり音楽の例を出すと唐突な感をもって受け取られるかもしれないが、昔話というものは本来時間に乗った文芸で、口で伝えられてきたもの、耳で聞かれてきたものなので、文字で書かれた文学と成立の原理が異なり、むしろ音楽と非常に似た性質を持っているように思われる。

この点については、別のところでいくつかの性質を指摘したことがある^(註3)ので省略するが、たとえば、音楽でいう「バーフォーム」Bar-Form とか、あるいは、いわゆる「転回」Umkehrung という音楽の技法が昔話の中にも見られる。この偽終止も昔話の持っている音楽的性質のひとつと考えてよいのではないだろうか。

さて、ここでまた先程の「つる女房」の話にもどるが、結局男はパートナーに去られてしまい、たった一人残った状態になるので、考えてみればこのときの男の状態は最初の状態と同じになるわけである。つまり、パートナーのいない、欠如状態である。欠如を内包した終結である。したがって理論的には次のようなことも可能になる。

すなわち、男がいて、鶴を助けてやり、その鶴が一度女房になったものの、女房の姿を見たため女房に去られてしまった。男は一人になり、しばらく暮らしていたが、今度は蛇に吞まれそうな蛙を助けてやった。するとその晩、また女が現われて女房になった。ところがあるとき、女房が言うには、自分の「くに」で法事があるから一日暇が欲しい。ただし絶対に後をつけてきてくれるな。けれども男は荷物を背負って帰っていった女房をこっそりつけていって見た。

すると、蛙がががが鳴いている川の淵まで行って女房は荷物を土手に置いて、蛙になって水の中に飛び込んだ。男は、なんだ蛙だったのか、といて、側にあった大きな石をどぼんとその蛙の真ん中に投げ込んだ。そしてざまみろと思って帰ってくる。すると夕方になって女房がまた女房の姿で普通に帰ってきて、夫が「どうだった、」と聞く。「今日はとても盛大な法事だったけれども、お坊さんがお経を読んでいる真っ最中に雷が落ちて、皆大怪我をした。それで大騒ぎだったんだ、」と女房が言うと、「それは雷じゃねえ、俺が石を投げ込んだのだ、」と夫が言う。女房は、「あなたはわたしの後をつけてきたんですか、それじゃ、もうあなたのもとにはいられません」と言って蛙になって帰っていった。

それで男はまた一人になった。今度はこの男は、「やはり女房はほしいけれども飯を食わない女房がいるといいなあ、」と思った。するとある晩女がやってきて、「どうかわたしをおいて下さい。わたしは決して御飯を食べません、」と言った。それで女房においてみたが、よく働くのだが、どうも米びつの米が減ってしょうがない。変だと思い、ある日出かけたふりをして二階の梁へ上がってそっと見ていると、女房は夫を仕事に出した後、大きな釜に米びつの米をぎあっと入れ米を炊きだした。そして米が炊き上がると頭の髪をどけて、頭の上にある大きな口に、おにぎりをどンドン放り込み、全部食べてしまった。男はびっくりして肝をつぶすのだが、夕方になると、なにくわぬ顔をしてまたおりてきて、「いま帰ったぞ」と言う。女房は、「ご苦労さんでした、」と言うのだが、男は、「お前には長く世話になったけれども、もう今日限りに帰ってもらおう、」と言って暇をだす。すると女房は、それじゃあ土産に風呂桶をつくってくれ、と言う。ところが夫が風呂桶をつくってやると女房は、よくできたかどうか中に入って確かめてくれ、と言う。そこで夫は風呂桶に入る。女房は夫が風呂桶に入った瞬間に、それをついで家から飛び出し、山の方に向け出した。夫はびっくりしてなんとか逃げようと思い、通りがかりの木の枝ににぶらさがって逃がれる。女房は山の中にかけて入った。そして、「今日はいい御馳走を持ってきたぞう、」とさげび子供達を喜ばせようと荷物を下ろしてみた。けれども中は空っぽだった。それで怒って、「どこかに逃げやがったな、」と追ってきた。夫は木の枝にぶら下がって逃げたのだが、その後きっとまた追いかけてくると思い、よもぎの原っぱがあったのでそこに身を隠していた。女房は本性を現わしてへびの姿になって、あるいは女の姿のまま日本の話はこのあたりは自由自在である一攫しにくる。そして夫の姿を見つけるのだが、よもぎの中にいる

ので入れない。「この中に入るとおれの体が溶けしてまう、」と言ってすくすく帰っていった。こうして夫は無事に逃げ出してきた。それ以来、よもぎを魔除けとして家に飾ることとなったのである。最後の部分は、よもぎを酒に入れて飲む、あるいはよもぎの代わりにかやというようなヴァリエーションがある。

長々と、試みに三つの話を接続したのであるが、それは、日本の話はいったん話が終わっても、そこで孤立状態になるため、次の話に接続し得るということが言いたかったからである。蛙女房の話にもなる。その次に魚女房が出てくるかもしれないし、猪女房になるかもしれない。つまりなにがきてもかまわないのである。そうやって延々とつながり、終着点なしということもありうるわけである。

ところで、最後に挙げた「食わず女房」の話は、日本の昔話の特徴を浮きぼりにするのでもう少し論じてみたい、この話は、人間がいわば、自然の中に一人ぼっちで置き去りにされた状態で終わっている。それは今まで述べた通り、完全に終わったわけではなく偽終止の状態である。日本の昔話では、自然の中のどこからでも妖怪の類が現われうる。別に特定の魔法圏から来る必要はない。魔術師である必要はまったくなく、ふつうの動物が突然人間に迫ってくるのである。そして迫ってくる時に人間にとってプラスの場合とマイナスの場合があり、このマイナスの例が「食わず女房」なのである。飯を食わないといいながら食う女房は、大体蛇か蜘蛛であり、同じように無限定な自然の中から現われる鶴とか蛙とか魚のようなプラスの要素として現われる場合とは違って、主人公に危害を加えるものとしてやってくる。しかしそれ以上に、今述べた通りプラスの要素もマイナスの要素も、特定の魔法圏からやってくるのではなく、自然の中から現れるというのが日本の昔話の特徴である。

そこには、しかし両者の相違もみられる。それは、プラスの要素の場合に迫ってくるものは、去られてしまいました、で終わるのに対して、マイナスの要素の場合には、おもしろいことに、その後、村人は魔除けのためによもぎを使うようになりました、と習俗の説明になっていることである。従来の昔話研究においては、このような話を習俗の由来話に分類してきたが、それだけで説明しきれないものがあるように思われる。つまり、日本の昔話は不気味なる自然の中に欠如状態のまま一人残って終わるため、そのときに、安全装置としてよもぎを必要としているのではないだろうか。それがないと世の中が不安でしかたがない。そこで安全装置をおく。安全装置であるから皆が使う。そういう意味で習俗となる。けれども意味としては、世の中の安全装置として、よもぎな

り、あるいはかやなりがあるのではないだろうか。

このことは次のようにまとめることができるだろう。無限定の自然のなかから主人公に追ってくるもの、それにはプラスのものとマイナスのものがある。マイナスのものの場合には、主人公が欠如で終わることが不安でしかたない。そこで世の中が安全でいられるために、終結部で安全装置を考えるのである。

ところで、世の中という言葉が突飛に使ったが、これも日本の昔話の特徴の一つである。世の中全体がめでたしめでたしで終るのである。一方、ドイツに限らず、ヨーロッパのメルヒェンは、主人公である個人のしあわせが強烈に出てくる。主人公が結婚してめでたしとなる。つまり、個人の幸せがクローズ・アップされるのである。ヨーロッパの昔話のすじがはっきりしているのは、そもそも個人の幸せを語るのがメルヒェンのすじなのであると考えられていることが大きな理由であろう。それに対して日本の昔話は、主人公が出てきても、その一時期の体験談にすぎないものが多い。鶴との結婚があったけれども、それは一時期の体験にすぎないのである。

あるいはもっと短かくて、一晩の体験というばあいもある。例えば「山寺の怪」とか妖怪ものに多いのであるが、一夜の体験をし、終わると主人公である男はまたはじめと同じ状態になる。ということは、次の晩にまた別のことを体験するかもしれない、そういう構造になっている。そこで次の一夜の体験にならないように歯止めをするのが、上述の安全装置というわけである。世の中がこれで安全になった。めでたしめでたし、と言って終わるのである。

初めに述べたように、異類婚姻譚で話の終着点にしようと思っていたのであるが、ここに至って、終着点が妖怪話に接続することになった。すると、今度は日本中の無数の妖怪話と接続することになり、いつまでたっても終着点に到着しない。そこで本稿はこれにて途中下車することにする。

(本稿は1986年6月22日、武蔵大学において開催された日本比較文学会における特別講演に加筆したものである)

注

- 1 『世界の民話』全37巻、1976～1986年、ぎょうせい
- 2 『世界の民話一ひとと動物との婚姻譚』小澤俊夫著、中央公論社
- 3 「時間的造形としての昔話」『民話の手帖』第6号所収、1980年